

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 25 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320108

研究課題名（和文）持続可能な未来へのコミュニケーション学構築

研究課題名（英文）Intercultural Communication Studies for a Sustainable Future

研究代表者

鳥飼 玖美子（TORIKAI KUMIKO）

立教大学・異文化コミュニケーション研究科・特任教授

研究者番号：80219360

研究成果の概要（和文）：

本研究は、異文化コミュニケーション研究を総合的な学として確立することを目的に、「持続可能な未来」を目指した「コミュニケーション学」として、文化、自然、言語、通訳翻訳という多面的なコミュニケーション分野を理念的に統合することを試み、「持続可能な未来へのコミュニケーション学」の構築を具現化する役割を担うものとして大学院教育を位置づけ、その体系化に挑戦した。成果として『異文化コミュニケーション学への招待』をみすず書房より刊行した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of our study was to formulate an integrated and innovative kind of intercultural communication studies. For this purpose, we placed the concept of “sustainability” as the main objective, incorporating various fields related to communication such as culture, nature, language as well as translation and interpreting. We have also applied our efforts to educational aspects of the graduate school, which we consider to be vital to consolidate theory and practice of communication studies for a sustainable future. The outcome of our research has been compiled in “Introduction to Intercultural Communication Studies” published by Misuzu-shobo.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,800,000	1,440,000	6,240,000
2010年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2011年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
総計	13,600,000	4,080,000	17,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：持続可能な未来、持続可能な社会、コミュニケーション学、異文化コミュニケーション論、言語コミュニケーション論、環境文学、環境人類学、通訳翻訳学

1. 研究開始当初の背景

本研究は、学際性を大きな特徴とする異文

化コミュニケーション研究を、「持続可能な未来を築くためのコミュニケーション学」と

して統合し、どのように総合的な学問として確立するかを模索することを目的としたものである。

元来、異文化コミュニケーション研究は、「書物の中の学問」ではなく、実践的行動を伴う学問であり、そこでは、社会学、心理学、社会心理学、文化心理学、コミュニケーション論など、多彩な分野を手がかりに実社会の現象が取り上げられる。したがって、その射程は、国家の対外政策、グローバルな移民問題から、地域における異文化交流や摩擦など、極めて広範囲に及ぶ。そして、これらの問題がすべて、多様な社会文化的コンテクストという「場」において起こる「コミュニケーション」に根づいた問題であることは明白であり、そのための研究・実践の基点は、グローバルを視野にいれつつ、ローカルに置かれるべきであることは、言を俟たない。

本研究の出発点となった平成 18 年度基盤研究 B「持続可能な未来のための異文化コミュニケーション学—明日の国際理解教育への試案」では、国際理解教育という切り口から異文化コミュニケーションを考えた。その結果、異文化コミュニケーション研究の学際性が、逆に、視点の拡散を招き、学問分野として深化することを却って困難にしているのではないか、という認識を抱くに至った。

2. 研究の目的

上述した問題意識に立脚し、本研究では、21 世紀の世界的課題である「持続可能な未来」を目標として焦点化し、そのための「コミュニケーション学」として、多様な分野を理念的、理論的整合性を持つ形で関連づけ、統合することを試みることを目的とした。さらに、「持続可能な未来」への行動理念としてのコミュニケーション学の構築を、研究・教育・実践すべての場に跨って具体化する重要な役割を担うものとして大学院教育を位置づけ、その体系的な確立を視野に入れた。

本研究科は既に平成 17 年度から 18 年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ「持続可能な未来へのリサーチワークショップ（異文化コミュニケーション学構築をめざして）」（採択）において、大学院という教育研究の場で「持続可能な未来へのコミュニケーション学」をどのように導入し、未来の「行動する研究者」をいかにして育成するかについての取り組みを検討したが、本研究では、とりわけ博士後期課程において、新たなコミュニケーション学の構築に向けたプロセスを、教育課程に組み込むための道程を模索することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究課題は、(1) 理論的枠組の構築、

および(2) 教育プログラムの検討から成る。本研究では、研究の主軸となる課題(1)およびそれと相互に関連する課題(2)を下記のように設定し、それぞれの課題において整理を行った。

(1)「持続可能な社会」概念の再検討をおこない、国際関係および地域性の両極からその有効性を検証し、さらに「コミュニケーション」の視点との理論的統合を、研究者それぞれの専門的立場(①~⑥)から考究した。

①文化とコミュニケーション

世界の各地域で人々が直面する諸課題の解決に立ち向かえる能力を備えた人材育成に資する教育的基盤の形成を視野に入れ、「持続可能な未来」につながるコミュニケーションのあり方を、発達面、認知面、思考面、感情面、行動面、さらにはコミュニケーションを取り巻くコンテクストをも含めて統合的に捉える枠組みと、文化を包含した相互行為全体に関わる理論の構築を試みた。

②自然とコミュニケーション

コミュニケーション学の対象分野として、「環境コミュニケーション」学を本格的に導入することを試みた。そこには、自然環境をめぐるコミュニケーション論と自然環境とのコミュニケーション論という二つの側面があるが、公共的な広報や議論をめぐる前者と、自然環境と人間とのつながり、関係のあり方をめぐる後者を統合することで、「環境コミュニケーション」学の全体の完成を目指した。

③言語とコミュニケーション

「持続可能な未来」への行動理念としてのコミュニケーションはどのような言語観に基づくべきかという基本的問いをふまえた上で、地球語としての英語の営みについて、特に言語実践の行われる「場」(コンテクストとしての世界、地域、環境、自然、個人など)をとりこんだ理論構築を試みた。同時に、地球語としての英語のモデル化を通して、「持続可能な未来」と「地球語としての英語」とが共に内包するグローバル化とローカル化、画一化と多様化の相克に対してどのように取組み、コミュニケーション学として結実させるかという課題への「臨床的」アプローチを模索した。

④通訳翻訳とコミュニケーション

国際文化論的視点から外交、国際協力、報道など対外接触における通訳翻訳の問題を考えると同時に、コミュニケーション学の視点から異文化と異言語を架橋するコミュニケーションという相互行為への参与者としての訳者のあり方と立ち位置について考察する

ことで、「持続可能な未来」の一翼を担う通訳翻訳の役割について議論を深めた。

⑤「持続可能な未来」と言語

「持続可能な未来」のためには、言語、通訳翻訳、文化社会環境、自然環境、以上の四者を、理論・実践両面において体系的に接合する必要があることは、もはや言を俟たない。そして、言葉や環境が（広義の）コミュニケーションを通して歴史的に創られ、創り変えられ続けているものである限り、以上四者を体系的に接合するという企てにおいて鍵となるのは、まず、そのような広義のコミュニケーションが一体、どのようなものなのか、その輪郭を明確にするような「コミュニケーション・モデル」を構築することとなる。

「持続可能な未来」を支える多文化共生を考えるため、言語学者のローマン・ヤコブソンや言語類学者のデル・ハイムズ、マイケル・シルヴァスティンなどによって構築されてきた、現代言語人類学におけるコミュニケーションの「出来事モデル」(speech-event model)を導入した。このモデルにおいては、ローカル・コミュニティを基点として社会的文化的なコミュニケーション過程を捉えるような理論化がなされている。「持続可能な未来」というプロジェクトにおいて、ローカル・コミュニティ、その社会文化的多様性と独自性、ローカル化（コンテキスト化）とグローバル化（脱コンテキスト化）の両極面を持つコミュニケーション過程、といった問題群の持つ重要性は大きい。

本研究では、これらの問題群に直裁に関わる現代言語人類学のモデルと知見を、どのように「持続可能な未来」に直結させるか、その方法を見出すことを目指した。主に、言語学、言語人類学、環境人類学などにおいて展開されてきた「コンテキスト」（すなわち、コミュニケーション出来事の生成する環境）という理論的概念に依拠し、どのようにして、自然環境の問題が、言語、通訳翻訳、文化社会環境の問題と、コミュニケーションという共通の基盤の上に体系的に接合するのか、その全体像を明示的かつ体系的に示そうとした。

⑥持続可能な未来と教育

自然と人間の関係を考察することは、「持続可能な未来」にとって不可欠である。この点についての理解は徐々に普及してきており、ユネスコを中心に「環境・開発・持続可能な未来への教育」として世界的な広がりをもつに至っている。本研究では、環境教育と環境コミュニケーションの課題を考察した。同時に「環境・開発・持続可能な未来への教育」に関する国際的ネットワークをさらに発展させ、それを「コミュニケーション学」

構築へ活用することを目指した。

(2) (1) で行った理論的整理を踏まえ、大学院博士課程における教育プログラム再編成のための試案を作成するために、①「持続可能な未来」への教育の実態の調査、②コミュニケーション学の理論と理念をどのように統合し、教育カリキュラムに反映させるかについて討議を行う研究会、講演会の開催、③調査、講演会を通じた持続可能な未来のためのコミュニケーション学ネットワークの構築、④「持続可能な未来へのコミュニケーション学構築」という本課題についての研究活動を反映した教育カリキュラムの策定、を行った。

4. 研究成果

2009年度～2010年度は、理論的パースペクティブの検討を中心として研究を進めた。理論的枠組み構築のために、まず「持続可能な社会」概念の再検討をおこない、国際関係および地域性の両極からその有効性を検証し、「コミュニケーション」の視点との理論的統合を、各研究者の専門的立場から考究した。その他、全体的な活動として以下を実施した。

(1) 調査：

ユネスコをはじめ持続可能な未来のための教育に関する研究を担ってきた国際機関や研究機関から情報収集すると共に、海外諸国の「持続可能な未来」への教育の実態をヒアリング等により調査した。

(2) 研究会の開催：

コミュニケーション学の理論と理念をどのように統合し、教育カリキュラムに反映させるかについて、プロジェクト・メンバーおよび海外からの研究者による研究会を開催した。

2010年6月には、スペインから通訳翻訳研究で指導的立場にあるアンソニー・ビム教授を招聘し、持続可能な社会における通訳学翻訳学の未来について探究した。11月には、EUにおいて異文化能力という概念を提唱しているマイケル・バイラム教授、多言語社会研究の第一人者である宮島喬教授を招き、持続可能な未来へ向けた多言語社会とコミュニケーションの関係を模索した。

(3) ネットワークの構築：

上記の調査および研究会を通して、持続可能な未来のためのコミュニケーション学ネットワークを構築した。

最終年度の2011年度には、異文化コミュニケーション論、環境教育、環境文学、環境人類学、言語学、言語コミュニケーション論、通訳翻訳学など多様な分野を理念的、理論的

整合性を持つ形で関連づけ、統合することを試みた。さらに、「持続可能な未来」への行動理念としてのコミュニケーション学の構築を、研究・教育・実践すべての場において具体化する重要な役割を担うものとして大学院教育を位置づけ、その体系的な確立を視野に入れたカリキュラムを策定すべく試案作成を行った。

また、これまでの研究を総括するために、理論的な整理と分析を各研究者の専門的立場から行うと同時に、公開講演会という形で、ESD、環境、通訳・翻訳、言語コミュニケーションの領域から外部講師を招き、「持続可能な未来へのコミュニケーション学」構築への統括的議論を行った。

2011年6月には環境教育研究で指導的立場にある石弘之教授（東京農業大学）を招聘し、「環境の歴史と地球の未来」への考察に基づき、分担者の阿部治を中心に持続可能な社会構築に果たすESDの役割について検討し、持続可能な社会を指向する異文化コミュニケーション学のベースを明示化し、その探求への道筋を提示するための議論を行った。11月には、公開講演会「環境と文学のあいだ9：メディア・言語・表象」を開催。環境コミュニケーション論におけるメディアおよび表象の問題に焦点を当てた。講師として、細馬宏通教授（滋賀県立大学：コミュニケーション論）と北川扶生子准教授（鳥取大学：日本近代文学）を招聘し、自然環境を見る/描く/記述する様態および規範性の問題をそれぞれの立場から発表していただいた。12月には、方言研究を中心とする社会言語学分野での第一人者である井上史雄教授（明海大学）を招き、日本の国際化と日本語の未来への考察を主軸に持続可能な社会におけるグローバル化とローカル化について言語体系および言語運用という観点から議論した。

2009年度から継続して行ってきた調査や研究会の開催に加えて、2011年度には、異文化/環境/言語/通訳翻訳コミュニケーションの4領域における外部講師との討論、各メンバーの研究成果をふまえた上で、持続可能な未来の為のコミュニケーション学への理念的な統合を目的とした研究書『異文化コミュニケーション学への招待』を2011年12月にみずす書房より刊行した。なお、この出版企画には博士後期課程院生も参加しており、博士後期課程における教育という側面があったことを強調しておきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計30件）

① Kumiko Torikai (2011). "Interpreting and Translation in a Japanese Social and Historical Context." *The International Journal of the Sociology of Language: Geographic Displacement and Linguistic Consequences: The Case of Translators and Interpreters*. No. 27, pp. 89-106. Berlin :Mouton de Gruyter. (単著、査読あり)

② 小山亘 (2011). 「オリゴ、あるいは指標野の中心：コミュニケーションの地平と出来事の視点」『人工知能学会誌』第26巻、第4号、334-343頁。(単著、査読あり)

③ 野田研一 (2010). 「〈風景以前〉の発見、もしくは人間化と世界化」『水声通信』No. 33, 116-128頁、水声社。(単著、査読あり)

④ 平賀正子 (2009). 「持続可能な未来へのコミュニケーション学へ：『社会に対して開かれている語用論』の可能性」『月刊言語』第38巻、第12号、98-103頁。(単著、査読なし)

⑤ 阿部治 (2009). 「『持続可能な開発のための教育』(ESD)の現状と課題」『環境教育』Vol. 19, No. 2, 21-30頁。(単著、査読あり)

⑥ 灘光洋子 (2009). 「〈鍵概念〉医療通訳」『日本保険医療行動科学会年報』Vol. 24, 161-168頁。(単著、査読なし)

〔学会発表〕（計34件）

① 平賀正子 (2011年11月12日). 「制度的談話分析の可能性:日本人留学生のアカデミック談話事例を中心に」日本英語学会・第29回年次大会公開シンポジウム、於:新潟大学。

② 小山亘 (2011年3月12日). 「社会言語学的多様性と翻訳不可能性」翻訳論研究会（日本記号学会研究プロジェクト）、大阪大学豊中キャンパス。

③ 阿部治 (2010年10月17日). 「日本におけるESD(持続可能な開発のための教育)」台湾環境教育学会、台中市。

④ Kumiko Torikai (2010年10月16日). "Pedagogical Implications of English as a Global Language; What Are We To Do." Invited speaker at PAC/TESOL Conference, Sook Myung University, Seoul, Korea.

⑤ Yoko Nadamitsu (2010年6月20日) "Respondent to Individual Paper Presentation" (Session: Critical Studies) International Communication Association Pre-conference held in conjunction with the 40th Conference of the Communications Association of Japan, Tokyo.

⑥ Kenichi Noda (2009年7月16日). "Tradition and Modernity: Ecocriticism in Japan", Eco-Philosophy and Future Direction for Ecocriticism, 台湾、台北市、淡江大学英文科。

〔図書〕（計25件）

① 鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘 (共編著) (2011) 『異文化コミュニケーション』

ン学への招待』みすず書房, (484頁).

②野田研一ほか(編著)(2011)『環境という視座: エコクリティシズムと日本文学研究』勉誠出版, (236頁).

③灘光洋子(分担執筆)(2011)日本コミュニケーション学会(編)『現代日本のコミュニケーション研究: 日本コミュニケーション学の足跡と展開』三修社, (158-167頁).

④小山亘(2011)『近代言語イデオロギー論: 記号の地政とメタ・コミュニケーションの社会史』三元社, (579頁).

⑤鳥飼玖美子(2011). 『国際共通語としての英語』講談社, (194頁)

⑥阿部治(監修)(2009). 『ESDテキストブック2: 希望への学びあい: なにを、どう、はじめるか』NPO法人持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J), (104頁).

⑦Masako K. Hiraga (2009). "Food for Thought: CONDUIT vs. FOOD Metaphors for Communication." In K. Turner and B. Fraser (Eds.), *Language in Life, and a Life in Language: Jacob Mey, a Festschrift*. (pp. 165-171). Bingley, UK: Emerald.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鳥飼 玖美子 (TORIKAI KUMIKO)
立教大学・異文化コミュニケーション研究科・特任教授
研究者番号: 80219360

(2) 研究分担者

平賀 正子 (HIRAGA MASAKO)
立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授
研究者番号: 90199050
野田 研一 (NODA KENICHI)
立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授
研究者番号: 60145969
阿部 治 (ABE OSAMU)
立教大学・社会学部・教授
研究者番号: 60184206
小山 亘 (KOYAMA WATARU)
立教大学・異文化コミュニケーション研究科・教授
研究者番号: 30366942
灘光 洋子 (NADAMITSU YOKO)
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授
研究者番号: 20286199
久米 昭元 (KUME TERUYUKI)
立教大学・異文化コミュニケーション学部・特任教授
研究者番号: 50131199
萩原 豪 (HAGIWARA GO)
鹿児島大学・稲盛アカデミー・特任講師

研究者番号: 00539207

中谷 一 (NAKATANI HAJIME)

立教大学・異文化コミュニケーション学部・准教授

研究者番号: 50599503

(3) 連携研究者

なし